

卑弥呼の墳墓を確定

2018年4月11日

—女王の業績を紹介—

茅 出彦 (ID 10063)

1. はじめに

卑弥呼の陵墓は現在の邪馬台国の所在地として常識になっている九州でもなければ大和でもありません。日本国内に存在すると信じている多くの人は何年論争しても結論を得る事はできないでしょう。邪馬台国の場所とその環境を紹介して各論に入ります。

卑弥呼の陵墓は韓国慶尚北道の高霊郡「池山洞古墳群」の中にあります。場所は大都市大邱の近くにある町で、古くは大伽耶と呼ばれた国の首都です。ここは韓国で初めて発掘された殉葬墓である44、45号墳をはじめ704基の古墳が分布しています。

高霊が日本の故地の理由

中国の戦乱期「越の国」から韓半島に脱出してきた天照大神の親たち（イザナギ、イザナミ大神）が半島に最初に作った国が高霊にあった「半路国」で、できたのは紀元後早々の時期と思われます。ここでイザナギ一家は後の天照・スサノオ神になる子どもたちを生き育て、青年期に天照神は金海に降臨して伽耶国を設立しました。スサノオはイザナギ神の元に戻り半路国を継承しましたがここでは将来の発展が見込めないと迎日湾（浦項）から息子と船で脱出して列島の出雲に渡って国作りに励んだ。150年代半島から列島の中心部に移住する人が激増し天照系の人々が列島は本来天照系が管理すべき国土であるとスサノオ6代孫の大国主神と国譲り交渉を行い成功した。故地高霊に戻ってきた出雲国の官僚や軍人は何もない所で仕事も無く生活できなかった。倭国大乱と称するこの混乱は中国にも知られたほど有名になった。この数十年に渡る事態を解決したのが女性実業家ヒミコであった。山奥で製鉄業を展開して外貨を稼ぎ農業の生産性を高め、豊富にできた鉄を軍事に

転用することで強力な倭国軍を作りあげ高句麗に対抗できるような力を付けた。ヒミコは国家「弥烏邪馬国」の女王の位置を有力者から授与された。この国を中国人は「邪馬壹国」とよんだ。この産業改革が成功して弥烏邪馬国は大発展し後に「大伽耶国」と呼ばれる国に成長した。主要な人物が日本に移住して衰退してしまった金官伽耶国に代って倭国の首都を引き継いだのは高霊の「大伽耶国」であった。この事実を知っている民衆は卑弥呼の逝去に際して感謝の意を表すため100人にもわたる人々が殉死したと思われる。高霊のシンボルである伽耶山は高霊のシンボルであると共に日本国のシンボルでもあり糸島半島の神武降臨の地にも可也山と呼ぶ筑紫富士があります。

これらの詳細は筆者 茅 出彦著「卑弥呼の墳墓を発見」—邪馬台国は半島にアマゾンのキンドル電子版にて出版しましたので参考にして下さい。

2. 倭国はどこにあったか

三国志東夷伝の倭国 筆者の調査では倭国の存在場所は明確で朝鮮半島にあったというのが漢以降現在に至るまでの中国人の常識であったことを知った。卑弥呼の活躍した3世紀の文献である「魏志韓伝」には魏志倭国伝とは違いはっきりと「倭国」は朝鮮半島内にあることを示している。この当時半島南部には王国として存在していたのは「韓国」と「倭国」の二ヶ国のみであった。その韓国とは馬韓と辰韓・弁韓の三つの国でなりたっていた。馬韓は後に百済になる現在のソウルを中心とする一帯である。辰韓は新羅、弁韓は伽耶と発展するが、この時代は境界もはっきりせず、色々な人種が入り混じっていた。韓は半島南部ほぼ全域を領して東西は海で囲まれ南は倭国と接していた。面積は約4千里（300km）四方あったという。風俗・習慣から見て辰韓・弁韓の人々は長江流域から

やってきた「越人」や「秦人」の可能性が高く北方の漢人から見れば「倭人」の仲間である。国々は明確な国境意識も無く混然としていた。魏の出先機関である帯方郡の指揮下にあったのはこの韓国と倭国の二ヶ国であった。この倭国は首露王^{しゅろ}が設立した伽耶（加羅）国のことである。

2. 倭国の誕生

2.1 首露王一家の半島移住

前漢^{ぜんかん}は比較的安定していたが、末期は非常に不安定になり光武帝が後漢^{こうぶてい ごかん}を建国するまでの間混乱が続いた。BC 50～AD 20年の時期がそれに相当する。燕国近辺の長城の建設をしていた南方からの移住者の朝鮮半島への脱出が大がかりに進んだ。後に倭国を作った首露王^{しゅろおう}の親たちも流れは同じだった。現在のソウルと推定される月氏国^{げつしこく}の辺まで一家は陸路を馬^{とほ}や徒歩で脱出してきた。彼らは漢江^{はんがん}に沿って歩き東南を目指して小白山脈^{しょうはくさんみやく}の峠を越えた。峠を越えると洛東江の上流に出会う。ここで小さな船を作って南下し、住むに都合の良い適地を探しながら下降して行った。このルートは伽耶国ができたときにこの一帯が伽耶連合国の古寧伽耶や星山伽耶として連合国の構成員になっている事実からも推定できることである。この移動は現代、世界各国で発生している難民と違って食料や住居地などの支援が一切ない中で、どのような生活をしながら移動したのであろうか。

ある所に仮設の宿を作りそこで作物を育てたり、魚を取り、狩猟したりしながら数年をかけた息の長い移動が行われたと思われる。最終的に落ち着いたのが形の良い山と丘陵に囲まれ、西側は大河洛東江で守られた安全の土地、高霊盆地^{こうりょうぼんち}であった。そしてここにあるシンボルの山を伽耶山^{かやさん}（1430m）と命名した。

2. 2 高霊は天照神生誕の地であり日本の聖地である

「^{とうごくこししょうらん}新增東国輿地勝覧」にある「^{しゃくりていでん}釈利貞伝」には、高霊郡の背後にある伽倻山の神である「^{せいけんぼしゅ}正見母主」と天神「^{てんじん}夷毗訶之」とから生まれた兄「^{ねじるちゆいる}惱窒青齋」（^{いしなご}伊珍阿鼓王）が^{おおから}大加羅の始祖であり、弟「^{ねじるちゆいえ}惱窒青齋」（^{しゅろ}首露王）が^{きんかんこく}金官国の始祖であると書かれている。この記録から読み取ることのできることは中国の「越国」の有力者であった天神は一族数十人の仲間を引率して高霊盆地に住み着いて国を開いた。中心者は天神の夷毗訶之と地元出身の正見母主である。記紀に記載されているイザナギ神とイザナミ神のことで彼らはここでも子どもたちを生み育てた。安全の地ではあったが生活環境が厳しく産業も無くて将来の発展性には欠けていた。また引き連れてきた一族を養うためには大河「洛東江」が海に流れ出す金海の港に進出する必要があると判断して準備をしていた。子ども二人が成人に達するのを待って金海進出を実行させた。兄弟二人の関係は兄が感情的で猪突猛進的に物事を進めていくタイプなのに対して弟は慎重に対応し、周囲の人望も高く新たな国の将来を託すのは弟だと天神は決めた。兄の^{いちんあし}伊珍阿鼓王は後の大伽耶になる国の始祖で記紀に記す「スサノオ神」である。一方弟が^{ねじるちゆいえ}「惱窒青齋」で^{きんかんこく}金官伽耶国の始祖首露王である。彼が天照大神である事が状況から解明できた。天照系の人たちのシンボルは「伽耶山」であり神武が進出した糸島半島にも「可也山」（365m）が存在し筑紫富士ともよばれている。鹿児島にある韓国岳も韓国の山では無く「駕洛国岳」の意であろうと想像している。

*注 「^{とうごくこししょうらん}新增東国輿地勝覧」とは李氏朝鮮時代の地理書。これ以前には高麗史地理志などもあるが、独立した地理志としては現存最古のもの。1530年、中宗の命により編纂した^{かんせんちりし}官撰地理志である。

2. 3 首露王の金海降臨

首露王が5人の仲間と金海に突然現れて金官伽耶国を設立した話は「三国遺事」などから

経緯を読み取ることができる。金官伽耶の所在地を図1に示す。彼らが降り立ったのは亀^き是^じ峰^{ほう}と呼ばれる場所で、突然の出現は現地の九人の有力者や大勢の人たちに驚きを持って迎えられた。大王さまが出現したのだという受け止め方をされ翌日から王の指示通り物事が進んでいった。日本の記紀神話では天照^{あまてらすひ}神が兄で弟がスサノオ神となっていて新增東国輿地勝覧とは兄弟の関係が逆である。スサノオも降臨した仲間の一人だが天の岩戸事件などにみられるように天照に対しては兄として敵愾^{てきがいしん}心丸出しで対応している。任地の高靈



図1 金海の宮殿所在地

- A 首露王陵
- B 大成洞古墳群
- C 王妃陵
- D 国立金海博物館

宮殿の横の地図は周辺の拡大図である。

現在洛東江の東は釜山市が広がり東西に分流している川の中州には釜山国際空港がある。金官伽耶の王室宮殿は西洛東江が平野を形成する山際の絶好な位置にある。首露王が降臨したと伝えられる亀是峰(きじほう)は図のCとD間の小さな丘にある。

に戻って国作りに励むも、資源や環境制約、人材などで高い発展が望めないと分かるや息子(イタケル)を連れて東の浦項の港から船で日本に向けて出発し、出雲に大きな国を建設した。

首露王は貿易には最適な良港を有し、平坦地の広がる

この場所に金官伽耶国

(駕洛)を設立した。AD 42年のことである。伽耶はインドのブッタカヤ(仏教聖地)由来の名前だとさ

れる。大河が流れていることと、川を遡上した奥地は発展性があることを見越してここを

選び王宮を構えた。金海にはこの時既に7万5千人の人たちが住んでいたという。五人はその後各地に分散して国（現在の日本の郡や町の規模）を作っていた。非常に親しく首露の補佐役的存在のタカミムスビ神は金官の隣のしょうかやくこく しそ小伽耶国の始祖になっている。

2. 4 首露王とは誰か

「三国遺事」の駕洛国記を読んでいて初代首露王の即位がAD42年でそれから199年まで王位にあり157年間生きたと記録されている。とても信用できる情報ではなく長い間、偽情報・神話とみていた。ところが逆にこの数字に込められた何かのメッセージがあるのではないかと種々検討した結果、出雲の国譲り神話と密接な関係があるのではないかと考えるに至った。

首露王そのものが「天照大御神」あまてらすおおみかみであるのではないかとの考えである。平均的な王の在位期間とはどの位あるのかを古代朝鮮のしらぎ こうくり くだら新羅・高句麗・百済の王の在位期間を調査した。親子のスムーズな世代交代の場合は平均で25年毎、事故などで数年の短期継承を除く平均的な王位の継承は22～23年と見て間違いのないようである。首露王の在位157年間は7世代に渡る長さであり、どのような理由でこんな表現をしているのか検討する必要がある。「からこくま駕洛国記」によるとAD48年16歳の許黄玉と結婚し49年太子のこと居登公が生まれたという。皇后は189年、157歳で亡くなり首露王はそれから10年経った199年に158歳で崩御し宮殿の東北に高さ一丈、周囲300歩のしゆるりょうぼ首露陵墓を作って葬られている。

首露王が降臨してから約100年後にあしわらなかつくに葦原中國の国譲り事件が発生した。この国（出雲を首都とした列島の中心部）は自分の息子おしほのみみ忍穗耳が治めるべき国だと天照神が主張して

大国主と談合を重ねた。交渉が進展せず高天原の「安河＝（洛東江）の河原」に幹部を集めて対出雲の交渉に誰を派遣するかを何度も話し合った。10年近い会談の後、交渉が成立し葦原中國は天照系の国になった。

天照神が長生きしなくてはならない理由は何か？

記紀に登場する天照神の交渉相手がスサノオ神と大国主であった。筆者は単純解釈しての相手は天照6世孫と決め込んでいたが公式の見解はそうでなく、同一の「天照神」そのものが解決したことになる。そのためには更に5世代分長生きしないと矛盾してしまうためこのような創作が行われたと考えた。これらの事実から「天照大神＝初代首露王」とであると推定するに至ったのである。

もう一つの決定的要因は最初に述べた中国人は金官伽耶そのものが倭国であると認識していたことである。

2. 5首露王が天照大神

伽耶国初代国王首露が「天照大神」であることがはっきりしたことで日本神話や語り継が

れてきた歴史の常識が大きく変わる。日本国の開祖は朝鮮半島南端にあった「倭国」の初代天照大御神であった。

2. 6 王宮と陵墓の大きさ

首露王が降臨して最初に手掛けたのが周囲1500歩（約350m）の宮殿や管理棟を中に作るための外城の場所を定めることだった。

*注 天照神について卑弥呼と結びつけて考える人が多いが卑弥呼は三世紀の人、天照はそれよりずっと前の一世紀の人。天照神は記紀に堂々と登場していて日本との関係は深いが卑弥呼は記紀にも登場しない人物。日本で著名な学者がこのような説を主張しているが冷静に考えて欲しい。また卑弥呼の墓は150mにも達する豪華なものであるとする大和説の有力者がいるが1歩が23cmであるとすれば全く誤った説になる。



図2 金首露王（天照大神）陵

古墳寸法：周囲300歩・高さ2丈

実測値：直径22m x 高さ6m 円周69mである

これが300歩であるから

歩の単位は $69\text{m} \div 300 = 23\text{cm}$

天照妃（許黄玉）陵墓は直径16~18m x 高さ5m

両方共円墳である。

卑弥呼の墓は円墳で径100余歩と記録されており日本の歩く1歩は1.5mだから150mの墓だと主張する人が多いが、筆者が主張する卑弥呼の墓は27mであり117歩に相当する。

これが百余歩であり天照神よりも径で5m大きい円墳である。

2. 7 伽耶^{か、やれんごうこく}連合^{めいしゆ}国^{くんりん}について

首露王が金海に伽耶国を設立し、伽耶連合^{めいしゆ}国^{くんりん}の盟主として君臨した。この国は金官伽耶国、駕洛国、加羅国、狗邪韓国など時代によって様々な名前を持っている。その時

できた他の五ヶの国は後の呼び方で小伽耶、安羅伽耶、大伽耶、星山伽耶、古寧伽耶である。この時百済や新羅はまだなく、統合して大きくなっていく核集落はあった。(三国遺事を参考に)

① 小伽耶は金官の西に隣り合わせて存在し、常に盟主、金官の官房長官的存在で天照神に忠告する大事な役割を演じた。三国遺事に登場する未露王は古事記にあるタカミムスビ神である。その息子大阿王はオモイカネ神で国譲りの時は交渉の幹事役として大活躍した。娘のアキツシ姫は天照の息子オシホミミの皇后で天孫ニニギ尊を生んでいる。こんな重要人物の正体は誰か？ 筆者は「ツクヨミ（月読）」神で夜の世界の統括者を命じられていた人物であろうと考える。

② 小伽耶の西に安羅（阿羅）伽耶があった。かなり個性的で強力な王がいて活躍の場面が話題に残る。ここからは船で近い距離にある金官との交流も簡単にできて立地条件に恵まれていた。中心の咸安近くには大きな阿羅伽耶古墳群が存在している。金官が力を失ってから高霊と咸安は伽耶を代表する二大国であった（ライバル）。大伽耶が滅亡する寸前には阿羅伽耶国が指導的役割を演じた。

③ 大伽耶 伽耶の親国としての命名が最初「半路国」として誕生したがスサノオが列島に移動してしまったのでこの地には形をなす国はなかった。卑弥呼の大改革により一つのまとまった国ができた弥烏耶馬と表記されているが三国志魏志倭人伝では「邪馬壹国」と記されている。鉄の生産販売で豊かになった高霊の場所は周辺を影響下に従え「大伽耶」と金官伽耶に替わって伽耶連合国の盟主になった。

④ 星山伽耶と⑤古寧伽耶 歴史の舞台には登場してない。首露王一家が高霊に進出する際に滞在した地域で仲間の一族を残していたので彼らが伽耶族の一員として活動を支え

た。

⑥ **金官伽耶** 伽耶連合の宗主国^{そうしゅこく} 中国が倭国と呼ぶのはこの国のこと。5世紀初めまではここが中心だったが連合国を統合する意志は無く軸足は列島に向いていた。532年に滅亡した。伽耶国が無くなって朝鮮半島は新羅によって統合され統一新羅国が誕生する。しかし基本をなす国は高句麗・新羅・百済の三国であり一般に三国時代と称されている。しかし5～6世紀の初めにかけては半島には倭国（伽耶国）が存在していて四ヶ国時代であった。

2. 8 金官伽耶の諸政策

金官伽耶国がどのような国でどのような特徴ある文化を持っていたかは国立「金海博物館」と釜山市東萊区にある「福泉博物館」の展示品を見学することで多くのことを学んだ。鉄と交易がどこよりも優れていたことである。それを記念してか1998年に開館した金海博物館の大きな建物は前面に鉄板が使われて荘厳な感じを受けた。鉄の文化はBC4世紀には中国の燕国から伝わったらしくそれを基盤にして伽耶を発展させる原動力になった。関心ある項目をいくつか説明する。

① 強力な騎馬兵 南船北馬の言葉があるように倭人は船には強いが馬にはなじみが少なかったはず。ところが倭軍の騎馬軍は圧倒的に強かった。2～3世紀頃、伽耶と高句麗が距離的に離れていたころ伽耶から出向いて戦いのやり方や防具（顔を防備する鉄の面など）を教えてもらった。北方民族秘伝の技術を習得した結果による。その後伽耶は製鉄技術に改良を加えて鎧や冑を軽量化して高句麗を上回る軍事力を持った。金官軍は新羅の金城を攻撃することが多かった。広開土王との戦いのときは5万の大軍に囲まれて敗退した。これが元になって金官軍の軍事力が劣勢になってしまった。（400年の戦争）

② 諸外国との貿易活動

古い時代から鉄の取引をベースにした交易活動が活発に行われていた。陸路の交易もあったが圧倒的な数量は海上貿易による取引であった。日本とは対馬を経由する九州ルートが存在し奴国（安曇族）が大きな利権を持っていた。楽浪郡や馬韓との交易では南海と西海を利用し、東瀛との取引では東海が使われた。金海から農機具や工具、刃物などを作るための原料として銑鉄が送られ日本などからはメノウや装飾品用の鉱石などがあったと思われるがどこから仕入れたものかははっきりしない。最近金海の鳳凰洞遺跡から伽耶の船の破片とみられる木片が出土して注目されている。

③ 伽耶土器 展示室には圧倒するような量の高杯などの出土した土器が並んでいて日本の博物館との違いを感じた。日常生活には主に赤みがかった軟質土器が使われ貯蔵・儀礼・装飾を目的とした物には陶質の土器が使われた。登り窯で1100℃の高温で焼成された薄い土器は洗練された曲線美を特徴としその製作技術は古代日本の須恵器製作に大きな影響を与えた。

3. 出雲の国譲り

出雲の国譲りは何のために行われた事件だったのか？

大きな国家の王が戦争なしに変わることがどうして可能だったのか疑問が多い。

そしてその交換条件でお互いにどんな成果を得ることができたのか。日本の歴史書では国譲りは神話扱いで掘り下げた議論は聞こえてこないが日本書紀では、繰り返して色々な説を紹介していて大事件だったことを報じている。天照神は出雲の国を開いたスサノオから数えて6代目の王「おおくにぬし大国主」に交渉を持ちかけた。天照大神は対岸の九州地区に多くの

移民者を送り出してきたが、新しく開けつつあった近畿地方に移住する人々が激増していた。この当時瀬戸内海は船の航行ができなかったので、ここに行くには船で出雲を経由して但馬の川筋から瀬戸内に入っていく必要があった。その首根っこをスサノオ系の大国主神に押えられていることは耐えられなかった。出雲の国を含む日本列島の中心を天照神が管理するため、譲り渡してくれとの交渉は難航して10年余の時間を要していた。この解決に当たって実力行使にでたのがフツヌシとタケミカツチの二神である。

3. 1 国譲りの条件

合意できた内容は次のようだった。

- ① 大国主神は^{ゆうかい}幽界の神事を受け持ってください。この言葉からは直接の意味が取りにくいと推定では日本列島の中心部は^{あまつけい}天津系に^{じょうと}譲渡しなさい。その代り^{さいし}朝鮮半島の祭祀と政治は^{くにつかみけい}国津神系に任せましょう。
- ② 大国主が住む宮殿を、太い柱で高く組み立てて造りましょう。大国主が生活できる空間を出雲に残こします。
- ③ あなた方が海上を往き来できるよう高い橋や水上に浮いた橋、立派な船などを用意します。出雲と半島間の海上輸送能力を大きくし、半島に引き上げる人々の便宜を図りましょう。・・・などを提供された。

この出雲の国譲り合意はいつごろのできごとか。

天照神が誕生してから5世代経過しているので一世代23年と見積もってAD42年に5代*23年=115年を加えることによって157年になるのでこの近辺と推定できる。

出雲国造の出雲千家が初代アマノホヒ神から数えて2016年に84世代目が誕生した

との情報があるので一世代の平均年数を計算すると $(2016-42) \div 83 = 23.8$ 年となり妥当な数値となっている。

4. 邪馬台国への道

4. 1 魏志倭人伝の検討

邪馬台国はどこにあったのかを検討した。「帯方郡より倭に行くには、朝鮮半島の西海岸に沿って水行し、倭の北岸にある狗邪韓国^{くやかんこく}に到着する。」

狗邪韓国は金海の金官伽耶と認識されるが魏使はここを通過していなかった。本来ならば帯方郡を出発して初めての大きな港である狗邪韓国に寄っていたならば対馬や一支の島のことよりも報告すべき見聞録がもっとたくさんあるはずなのに、全く何も書かれていない。対馬に到着後は現地調査と島民の案内で末盧国^{まつろ}を経由して伊都国に到着している。中国から列島にやってきたのは初めてで詳細に見聞録を記載しているが彼らはこの伊都国を狗邪韓国だと錯覚してしまっていた。実際の行動は間違っただけを直ぐに引き返して狗邪韓国から洛東江に沿って高霊にあった王宮を訪問していた。行程の8割方は終了し、王宮の門番的役割を果たす場所から更に水行・陸行で2ヶ月もかかる矛盾を記述している。これは役人が正式報告書を提出する時に現地で聞いた出雲經由大邱ルートを書いたものであった。従って方向も時間も全く信用のできない情報で日本人研究者を現在まで騙し続けているフェイクニュースであった。

魏使がなぜこのような文章を作らざるを得なかったか？

それは彼らの犯したミスコースに起因している。狗邪韓国から真っ直ぐ高霊を目指して行けば12千里で済んだのに狗邪韓国から伊都国の往復する時間を浪費してしまって、女王

に下賜品を届けるだけの使節が2～3ヶ月帰国が遅れてしまった。図3に正式なルートと彼らが間違っ
て時間を浪費した事情を説明しています。これをカモフラージュするため伊都国の人から
情報を仕入れて別コースを仕上げた。スサノオがたどった逆コースで出雲から仰日湾
まで船を使い大邱経由で高霊にたどり着くと約2ヶ月の説明が可能だった。2014年
正月これに気付いて興奮してしまった。

4. 2正しい邪馬台国への道

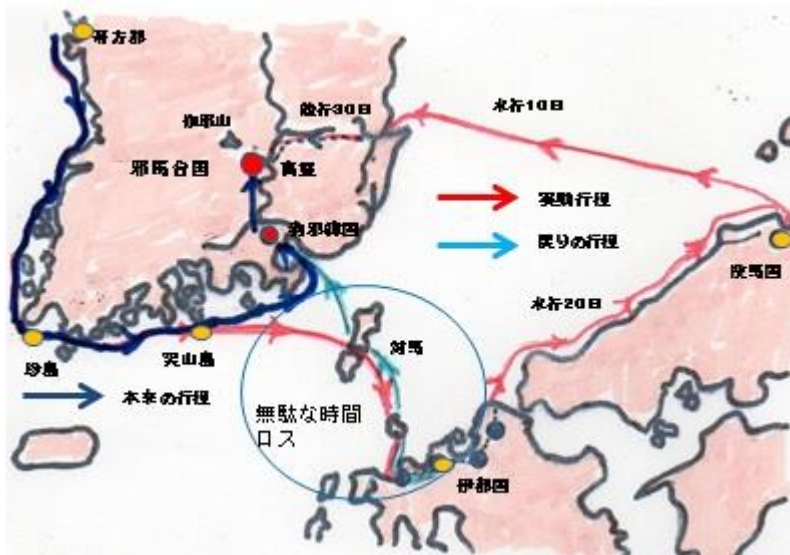


図3 邪馬台国への渡航・陸行ルート
伊都国へのミスコースで時間を消費した

帯方郡から邪馬台国へは一万二千里である。朝鮮半島の西海岸に沿って南に水行し、金海の地（狗邪韓国）に上陸する。ここまで約1万里（750 km）。船で洛東江を遡上して高靈らくとうこうにある邪馬台国の宮殿までは同じように 150 km（2,000 里）の距離である。（グーグルマップの距離計算で求めた）最初から予定したルートだと総距離900 km（120,000 里）。1里は75 m相当であるとしたら魏志倭人伝の通りであった。

4. 3 邪馬台国王宮の所在地ミオヤマ

古代言語学者である朴炳植^{ばくびんくしよく}は「日本原記」の中で「邪馬」とは慶北省高霊地方を指す言葉であるとし、この地区を呼ぶのに「弥烏邪馬^{みおやま}」という表記があったという。これが現地語の国名で、意味するところは神聖で偉大な

三国志 魏志倭人伝	三国時代 半島国名	現在地名 州・郡市
邪馬台	弥烏耶馬	慶北・高霊
狗奴	狗弥	慶南・金官
斯馬	斯蓋	慶北・慶州
於投馬	投馬	日本・出雲

る高霊の国。日本の有力者は「ヤマト」と関連付けて「ヤマタイ国」が常識になっているが言語学者は壹は「亀」の意で「邪馬壹国^{やまいちこく}」が正解だとする意見である。倭国のシンボルは亀旨峰^{きじほう}でも分かるように亀であり、ミオヤマの中国語訳「邪馬壹国^{やまいちこく}」はぴったりの表現で筆者はこの意見を支持している。このような面からも邪馬台国は高霊にあったのが正解であろう。また魏志倭人伝の終わりの部分に女王国について次のように書かれている。「女王国の東、海対馬海峡を渡ること千余里で、また国々があり、これらもすべて倭種の国である。これらを含めて倭地の様子を尋ねると、海中の島々の上にはなればなれに住んでおり、あるいは離れ、あるいは連なりながら、それらを経めぐれば、五千余里にもなるだろう。」倭人は海中の島々に住んでいて朝鮮半島と九州の島々を巡ると五千余里（約380 km、径で120 km）にもなる大きな範囲である。

5. 偉大な王卑弥呼

5. 1 卑弥呼の陵墓

高霊郡の八ヶ村は村ごとに古墳群と山城を持っていた。これらは大伽川流域に広がる平地を望む丘陵の上に立地して

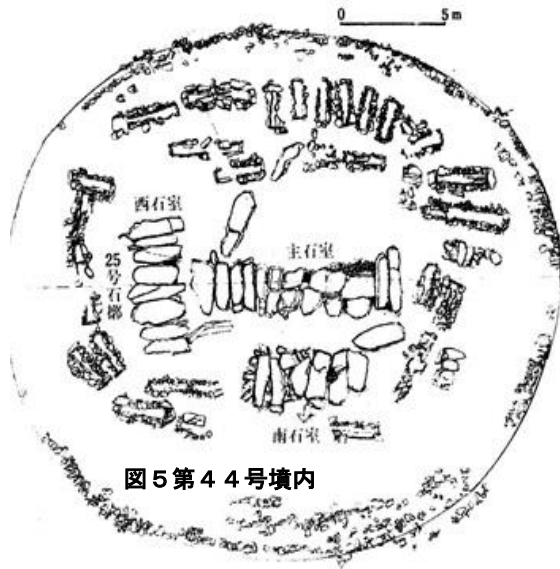


図4 池山洞古墳群

いる。その中で王級クラスの古墳群と見られるのが「池山洞古墳群」である。標高321mの主山^{しゅさん}から南に延びる尾根の主稜線上と東南に枝分かれする稜線上や斜面に墓地が営まれている。主山の山頂には山城があり山麓の平地には「王宮址」と伝えられている場所がある。ほとんどが円形の墳丘（円墳）を持ちその外周には外護列石がめぐり中心部に墳墓がすえられている。山腹一帯には直径10m前後の小型墳や墳丘の有無が分からない石槨墓が散在している。全部で700基ほどの墓があり王宮墓の並ぶ反対側の北方にも散在し、約4kmに渡る墓域である。発掘済の古墳は2基のみで未だ多くの発見が期待できそうである。中腹や低い稜線には10～15m級の中型墳があり高い稜線には直径20mを越える大型墳が並んでいる。筆者が想定している卑弥呼の第44号墳は丘陵の中ほどにあり、壺与と推定される第45号墳はすぐその上に位置している。古墳の全体配列としては古い小規模なものが陵の下部にあり上部に行くに従って新しいしかも大型墳墓が並んでいる。44号（調査の順番で番号が付けられている）墳は大型墳墓では最も低い位置にあり国家の最初期の墓と見做されている。そして一列に並ぶ第47から51号墳の5基の墓は中国の王朝に朝貢した倭の五王そのものの墓であったと者は想定している。最高部

にある40mを越える超大型墳は倭国の最盛期に君臨した「倭王武」の姿と見ている。

卑弥呼の墳墓の内部を写真で紹介



主石室を中心に殉葬墓が円形に並ぶ



図6 大伽耶王陵展示館

第44号墳内部を再現 殉葬墓をランプで点灯表示 窓際に一周できる見学路がある



図7 主墓で上部に眠る卑弥呼女王

下部には殉葬者が



図8 30歳の父親と8歳の女兒

殉葬墓内は複数の殉葬者が含まれる

5. 2 墳墓の内部

図5～図8に内部のようすを写真で示す。墳丘の規模は27mの円墳で中央の主墓は
たてあなしき
竪穴式石室9.4mで西と南にも石室が配置されていた。主室からは馬具、冑、銅盒などの
副葬品があったが西・南石室は伽耶土器と人骨の埋葬が確認された。墳丘内部には32基
の石槨が二重の円を描くように配列されていて金・銀・銅製の耳飾りが出土している。人
骨からの判定では20～30代と若い人たちが多かった。3基からは紡錘車出土されて
いるので女性の殉葬と見られる。44号墳の上にある45号墳は主石室に3体の埋葬があ
り主被葬者と2人は殉葬者であった。墳丘内には11基の殉葬石槨があり副葬品の量がと
ほしくて金・銀製の耳飾りを持っていたことである。直径23.5mの円墳であり金銅冠
飾、金製耳飾り、三葉文環頭大刀、馬具などが副葬品であった。筆者はこの墳墓が壱与の
であろうと考えている。邪馬台国女王の墓は金官伽耶の近くにあるとの思いは間違いで、
大伽耶の国、天照大神誕生の地・伽耶山の麓「高霊^{こうれい}」の地にあった。「魏志倭人伝の卑弥
呼の墓は円墳で大きさの径は百余歩、殉葬した奴婢は百余人」と記されている。墓のサイ
ズは直径27mで100歩が23mに当るので117歩であり百余歩と一致する。殉死者
は墓の内部と44号墳の周辺に小さな墳墓が集まっておりこれらも含めると百人近い人
が殉死したのではないかと推定される。大型墳は近接して一列に並んでいるが44号の周
辺には広いスペースがあることを筆者は確認している。

殉葬墓というのは非常に珍しい存在で韓国でもこれを展示するために「大伽耶王陵展示
館」を作り44号墳の内部を再現展示している。韓国内でも古墳の立地、規模と構造、出
土遺物（大半は盗掘されてしまっていたが）から見てこの古墳はいままで発掘された中で

最高位の位階をもった王の墓であると評価されている。また「池山洞古墳群」は全て竪穴式石槨墓である。石が豊富にあって木は松位しか育たないので古墳には木が生えてなく良く整備されているとの印象が強い。当時既に広域の交易があったことが沖縄から運ばれた大きな貝殻の展示で分かった。DNAの調査で殉死者の年齢や男女が分かった例がいくつかあった。説明で石槨せつかくという用語があるがこれは木棺や石棺を覆うための覆いの役割を持つもの、石室とも。棺なしで槨に直接葬られている小規模な墓も多数あったようである。殉葬墓はランプ表示されているので所在が良くわかった。卑弥呼の殉葬墓を見学して女王に対する見方が変わった。魏志倭人伝には偉大な巫女として記録されているがこれだけ大勢の人の心を動かし感謝される偉大な女王とはどのような存在だったのか。

5. 3 卑弥呼の改革と大伽耶誕生

以下は全て魏志倭人伝からの情報に基づいての筆者の考察である。倭国は後漢の韓恒帝から霊帝の時代（146～189年）にかけて国が乱れてお互いに攻め合い何年も主がいなかったとされる。日本書紀によると150年代出雲で国譲りが行われ出雲国は天照系の国になり、出雲国の役人や軍人（住人の3割相当）などが先祖の出身地高霊に戻された。出雲と金海の港・棧橋・輸送船などを天照側が準備した（日本書紀）。この帰還者数がどの程度だったかは不明である。スサノオ神が将来を悲観して出雲に進出したように高霊には生活の手段となるような産業は何もなかった。極めて少数の人が暮らす盆地に2千人規模、家族も含めると1万人相当の人が突然入ってきた。現在でも高霊郡の人口は3万7千人位である。魏志倭人伝の中に記載されている邪馬台国の人口数が7万5千となっているが倭国の首都という錯覚で前の首都だった金海の人口を誤写してしまったと推理している。町は大量の移民者でゴッタ返していたことが想像できる。高霊の各集落では食料や住宅が不足

し、仕事がないなど生活の基本条件を満たすことができなかった。各集落の有力者はこのような状況の中お互いに喧嘩を繰り返して収まる所を知らなかった。40年近くに渡る混乱の中、若き女性リーダー卑弥呼が立ち上がった。彼女は狭い土地で仕事も無く争っている男どもにまず仕事を与えなければならないと考えた。金海では紀元前から倭人に依る鉄の生産が行われ各地の人々が市場に集まって交易を行っていた。大きさ、重量・形など規格化された鉄片は貨幣としての価値があり漢の楽浪郡や帯方郡との取引で使われていた。高霊の町の近くからも取れるはずの鉄鉱石で鉄貨を作り市場で取引できればお金が稼げると生活が豊かになり今の困難な生活から抜け出せると卑弥呼は考えた。紛争解決の目途も無く騒動を繰り返し、無気力な毎日を送っていた有力者たちが彼女の提案に徐々に賛同者が増えていった。彼女の仕事ができ易いように女王に推薦した。希望のある話により有力者は積極的に協力し卑弥呼も女実業家として活動を始めた（210年頃）。当時の鉄の生産設備は大伽耶博物館に展示されているような小規模なものであった。高霊の中心部から近い美崇山（734m）の麓に条件の良い鉱山を見つけて鉄作りを開始した。またその近くに土器の生産工場も設置して容器を作り「登り窯」で焼成した。このような仕組みを作り上げると仕事にあふれた大量の人がいたので生産量は日を追うごとに拡大した。設備規模は小さいので比較的簡単に窯を作ることは可能な上、鉱石の収集運搬、木材を集めて木炭を作る、生産設備の運転・管理、できた素材の加工作業、港までの輸送など働く場所が急激に増えた。また金海に運ぶとお金が入った。この美崇山の麓は原料の鉄鉱石や砂鉄などが取れ、水路で搬出し金海の港まで川でつながっていた。周辺にはたくさんの製鉄炉が建設され働く人たちが大勢集まってきて活況が出てきた。大伽耶は鉄の大生産地との思い込みがあったため誤解していたが卑弥呼が声を上げるまで鉄は作っていなかった。失業者の大群

を鉄づくりに使ったため大量の鉄を金海に届けることができた。これが卑弥呼の「邪馬台国」を大国「大伽耶国」に生まれ変わらせるきっかけになった。軸足を列島に向けて半島内では力を失った金官に替わって伽耶連合諸国のリーダーになったのが高霊の大伽耶国であった。豊富に取れる鉄を農機具に利用することで高霊盆地の農産物の生産力を飛躍的に向上させた。またお金と豊かな生活を得たこの国では有り余る人材と資金を軍備にすることも出来るようになった。5世紀には鉄で武装した無敵の軍隊までが出そろい倭の五王が中国に朝貢するような国に変貌した。騒乱の地、高霊がすばらしい繁栄の国に生まれ変わったのである。卑弥呼はそのいきさつを知る当時の人々に大へん感謝されて百人にもわたる人々が自ら殉葬墓に入った。

その証拠がこの第44号墳である。殉葬者が奴婢との表現になっているが若い父親と10歳にも満たない娘だの暗いイメージを持つ無理やり葬られた人々ではないように筆者には感じられた。卑弥呼が248年60歳で死去したと仮定して卑弥呼の生涯を考察してみる。誕生は189年、有力者を説き伏せ女王に推薦されたのは20歳位、210年頃のことだった。歴史書に現れるのは倭人伝の魏に朝貢した50歳の時で、それから亡くなるまでの10年間についてたくさんの情報がでている。晩年自分の活動成果が見事に花開いて理想の社会が実現した後は政治をただ一人の弟に任せるとか千人にもわたる奴婢がいたというような宮殿内部情報がある。しかし20歳から40歳代までの活動はそんな生易しいものではなく男どもと張り合った苦悩の時代を過ごしたことはいつの時代でも変わらない。卑弥呼は巫女の宗教力で大乱を解決したように倭人伝から読み取っていたが、卑弥呼がこれほどまですごい感謝を受けたのは国の再生を果し、半島に新羅や百済までを従えさせるほどの「大伽耶」国を誕生させた功績にあった。

図9 卑弥呼が開発した製鉄所



5. 4 ツヌガ・アラシトの列島派遣

天日槍などと呼ばれていた大伽耶国の王子アラシトが但馬に居を構えて日本海側から近畿地区に鉄の販売を始めたのは230年代と想定している。女王になってから20年で生産量が大幅に増え鉄欠乏の地、関西方面に焦点を当てて積極的販売に踏み込んだ。これは卑弥呼と話し合いの上での決定であり二人は呼吸の合ったビジネスパートナーであった。卑弥呼は共立の王と言われているがオオクニヌシを引き継ぐ男の王もいてアラシトはその王子だった。大加羅の王子都怒我阿羅斯等は頭に角の生えた人間で日本に去った恋人を追いかけて難波に来たという神話が日本書紀の垂仁記に載っている。

5. 5 阿羅伽耶との紛争

卑弥呼は南にある狗邪国の男王卑弥弓呼と不和で戦争状態にあった。鉄鉱石を採掘していた美崇山は阿羅伽耶と邪馬台国との国境ラインが通っていた。高霊側の双林製鉄は山の東面であるが西面には海印寺につながる伽耶川が流れている。この川沿いに良質の鉄を大量に作った冶炉製鉄という有名な場所がある。卑弥呼の時代にはここで働く人も高霊の町

からの移住者であり、できた製品の輸送基地も高霊にあった。しかし場所は阿羅伽耶の所
属になっていたので卑弥呼の指示するようには阿羅伽耶側が動いてくれず争いになって
いたものと思われる。5世紀にはこの地域は大伽耶の領域に含まれてしまったので問題な
いが卑弥呼の時代には土地の所属や製品の輸送・取扱いを巡って紛争があったものと思わ
れる。

5. 6 大伽耶の成長

高霊の地は誕生当初は国名半路国であったがスサノオの出雲への脱出で王のいない普通
の邑レベルの国になっていた。修行者が多く生活する宗教都市的存在であった。卑弥呼の
大改革でようやく国らしきものができた。魏志倭人伝ではこの国を「邪馬台国^{やまたいこく}」と呼んで
いる。卑弥呼革命により鉄の生産量が増え、その加工技術も向上した。魏志倭人伝にもあ
るようにこの当時最大の外敵は北方からの圧力により南下している高句麗の動きである。
そのためには宮殿の北方に厳重な警戒網を敷いてそれに備えていた。鉄を農器具に加工し
て使うことにより高霊盆地の農産物や家畜の生産量が飛躍的に増えた。鉄を金海の港に運
び列島や楽浪・帯方郡などと活発な交易を開始した。これによって国が繁栄し、卑弥呼の
後の壹与の時代を経て「大伽耶」と呼ばれる国になった。鉄はたくさんの強力な兵器の生
産も可能にした。大勢いた職を持たない人を集め、強力な武器を駆使し、規律が取れた軍
隊は向かうところ敵なしの「倭国強力軍団」を生み出した。周辺の新羅、百済などは戦力
面では力が無く倭国軍は連戦連勝で「大伽耶国」は洛東江中流域の他国の領域をあわせて、
大きな勢力の盟主となった。朴炳植はこの領域を「ウガヤ（上加耶）」とし金海に近い所
にある国を「アラカヤ（阿羅伽耶）」と呼んで区別していたとある。

5. 7 金官伽耶の衰退

4世紀中ごろ、高句麗軍の洛東江流域進出以降、多くの国々の中で大伽耶が徐々に頭角を現わし始めた。5世紀後半頃には一番著しい勢力として姿を現した。5世紀初め広開土王の高句麗軍に撃破された金海勢力はその後衰退し、敗戦の被害を受けなかった高霊を中心とする内陸の勢力が後期伽耶王国を主導し始めた。高霊は南海岸から洛東江を利用して遡れる地域である。そして高霊は居昌、咸陽などの内陸地域と通じることができ、更に小白山脈を越えて茂朱、長水などにも通じることができる。北は星州、金泉を経て、秋風嶺を越えて大田やソウル方面に進むことができた。東は大邱に移動できる。このような地理的利点が、5世紀以降伽耶諸国内で一番力強い地域国家として成長することができた要因であった。

成長基盤 大伽耶が伽耶後期の強力な国家として成長することができた基盤には、有利な交易路を利用した鉄の輸出と、安定した農業基盤であった。それらを守ることができる強力な軍事力を持っていたことがバックにある。池山洞古墳群のような大型古墳群は大伽耶の発展の姿を最も適切に見せてくれるものである。

もし卑弥呼の改革が無かったならばこのような大伽耶の発展は期待できず、日本にも鉄が来なくて古墳時代の繁栄は無かったか、遅れた可能性があるだろうと思う。